「風早郷」へ六月に里帰りしたい

心づもりにしていた六月五日（二〇〇〇年）からの「風早郷」へのはじめての里帰りは、順調に進められそうだ。

全日空での松山行きも「特割」料金で予約できた。北条市（当時）には適当なホテルもないようなので、鹿島の国民宿舎に電話を入れてみたところ、３月で営業を止めた、という。建物の老朽化がひどいから、と電話に出た女性が虚ろに笑う。適当な宿は？と訊くと「門田旅館」と「水軍ユースホステル」の電話番号を教えてくれた。

他の用件もあって、北条市役所の社会教育課にも連絡をとったのでどちらがいいか、探りを入れたところ。「門田」を薦められた。素泊りで四〇〇〇円だという。この旅は、できる限り出費を切り詰めてみるつもりだったから、出足好調だと、ひとり笑いする。

■五泊六日の旅程を組んでみた

北条では二泊が必要だろう。六月七日は鈍川温泉の「美賀登」とした。玉川町竜岡を中心に、ここはかなり重要な取材ステージとなるはずだ。八日は奥道後の「かんぽの宿・寿楽荘」がとれた。九日は、この旅の予備日にあて、「久万山」か「大三島」か、ど

高縄山頂からの斎灘眺望　興居島から右手に忽那島諸島まで見える

ちらかが行き先となるだろう。十日は、午後三時までに、中学時代の同窓会に出席するため、京都センチュリーホテルへ着いて置きたい。松山空港から伊丹に入り、バスで京都入りすることとした。当初の計画では、今治からフェリーで大三島へ渡り、そこで一泊。大山祇神社へ参詣し、再びフェリーで広島県・竹原へ移動するつもりだった。河野通直と殉死した家臣たちが葬られている哀しみの地を、歩いてみたかったが、レンタカーの処理と、そのあとの京都までの便がよくないのが判って、それは断念した。

こうした旅程を組んだ以上、なんとしても祖父の養父「正岡周平」のもとへ辿りつかねばならぬ。

もっと足元から固める方策はないものか。父・徳一はもう彼岸の人だ。母・澄子は八八歳となり、わが妹・享子の世話で介護を受ける恍惚老人状態。とても話の訊ける状態ではなくなった。こうなったら、父方の伯父筋から洗い出して行くしかない。幸い、嶋津良枝（順吉伯父の長女）が健在だと、わが弟・浩司の示唆があって電話連絡を試みた。

■「跳んだカップル」だった、とその人は笑う

一〇歳年上の従姉は、記憶通りの声だった。電話でやりとりしていると、その風貌までが見えてくるようだった。とはいえ、ぼくの記憶のなかで凍結してある若き日のものだったろうが……。すでにご主人も逝き、実弟の正岡照孝氏の家族と暮らしていると

いう。

「宮田（直方市のすぐ傍の町）に母方の実家・乗松の小母さんがいて、四国のお墓のことも知っているみたいだから、今のうちに聞いておかないとね」

屈託のない元気な声だった。そちらは八幡に移った正岡兄弟の惣領だから、戸籍も真っ直ぐ、愛媛県に繋がるはず。こちらの事情を説明して、大至急に手配できないか、とお願いした。

「いいよ。あたしも興味あるし。しっかり調べて、教えてね」

「ああ。ところで父の聞き書きの中で、重吉さんとクラさんは駆け落ちしたとあるけど」

「うん、そうらしいね。お医者さんとの縁談が決まり、挙式のその日、花嫁衣装のまま、駆け落ちしたと聞いたけど。当時としては大事件で、翔んどるひとやったみたい。写真？　ぼやけとるけど、あるはずよ」

花嫁衣装のままだったかどうかは別にして、祖母の行動には大いに興味をそそられた。これまでの経過を説明するより、これまで書きあげた分の「風早郷へ、急ぎ往け！」のコピーを送ることとした。彼女の反応次第で、今後の動きと目的地への着地の仕方が違ってくるからだ。以下はわたしの勘にすぎないが、どうやら、「周平さんのクマヤマ」は上浮穴（かみうけな）郡の久万山に落ち着くのではなかろうか。

今のところ、松山に結びつく材料は何一つ、出て来ない。念の

ため、国会図書館の図書目録を再検索してみた。「特１１２」という奇妙な枠組みを発見した。大正年間に刊行された『愛媛県商工人名録』（二五六ページ）と『愛媛県人物名鑑』（第一輯～第五輯）の二冊。目を通して置きたい蠱惑の匂いがする。

「ああ、これはですね、関東大震災当時の刊行物は希少なので、奥の別室でご覧いただくことになっています」

係の女性が丁寧に応えてくれた。カウンターの左端から奥まった一室を目指す。ガラス戸に仕切られた静かな空間があった。壁際には「触れないで」と注意書きのある古い名鑑がずらりと並べられていた。ことりとも物音をたてるのが憚られる濃縮した空気。息が詰まる。やがて、わが名を呼ぶ声。手渡された四冊（第四輯と第五輯は一冊にまとめられていた）を、まるで宝石の入った箱でも受け取る気分で、おし頂いた。色の変わり始めた和紙に顔写真入りの人物紹介。多分、発行元「海南新聞」の勧請に応えたものだけが掲載される、その手のものとは言え、今になれば、当時の著名地方人を知る貴重な資料である。書き出しは決まって「君は……」とあり、本人の記述を文章化している様が読み取れて、愛嬌すら感じられる筆致が面白い。職業、現住所、家族構成等が丁寧に書かれていて、富国強兵時代の「社会」が覗ける。

■高縄神社神官家はみんな「重」がついている！

第一輯は「松山市」と「温泉郡」。祈るような気持ちでページをめくる。「松山」の項には「正岡姓」はひとりもいない。続いて「温泉郡」であった。ここは旧風早郡を含むのだから、当然、何人かはいるはずだ。二二五ページから次にかけて四人の「正岡氏」がいた。

正岡宗逸　僧侶　禅臨済宗妙心寺流壹等寺萬松山大安寺住職
嘉永四年九月十七日生まれ
今治日高村　亡長野弥三郎二男　正岡家の家督養子
相続
甥　宗琢　妻　ツル　姉　トメ　養子　亀道

こんな具合であった。

正岡重男　神官　高縄神社々掌宮内八番戸
明治二六年五月三日　生父　重一　兄　義定　重秀
妻　松枝　男　重胤（大　正十年七月六日）重一の息、
愛媛県巡査、
正岡姓は十五代前より。経孝の弟・経兼のとき正岡丹後守と改称。君の家を正神主家と称し、その分派たる正岡重政家及び正氏家を侍家と称す

正岡宗圓　温泉郡川上村南方１３３　南昌寺住職

正岡重政　宮内九番戸　明治一九年家督を相続す　村役場書記、小学教員、高縄神社々司の傍ら、教員を勤めつつあり

■枝分け、帰農した正岡氏が棲みついた先

第二輯は「上浮穴郡」。「うけな」と訓む。伊予の北海道とも、軽井沢とも呼ばれる山間部であり、「久万山」が含まれる、悩ましい地域であった。

正岡金次郎　上浮穴郡柳谷村柳井川一七一八の一　農業　明治十一年四月一日生　藤坂彦五郎の二男、仝村正岡丑弥の養子となり、家督相続

正岡政四郎　杣川村杣野　教員　明治二七年五月十一日生

正岡慎太郎　勲八等、蹄鉄工、牛乳販売、醤油醸造業　久万町一五七番地、電話四一、明治十六 年一月二〇日生　仝郡弘形村の出身　明治三九年に久万町に転居　蹄鉄工開業

正岡助太郎　農業　上浮穴郡明神村東明神一五八番戸　明治八年十二月一〇日生

「越智郡」は第四輯と第五輯の合併号に。馴染みの名前が世代交替している。

正岡　寛　素封家　龍岡村上　乙三番地　明治三〇年一月二四日生　祖母ソノ、母タネ、弟達夫、仝衛、姉律子、仝八重子、叔父定雄、叔父の妻子、従弟和久君は故虎三郎の長男、大正九年に相続す　中央大学法科卒　憲政会愛媛支部幹部なり

三坂峠を越えると東明神の里

久万町に入る手前の名所「仰西渠」

正岡太八　村長　鈍川村鬼原甲三四八番地　明治一七年十二月十三日生　父梶平　母ハヤ　妻アイ　長男義男　二女キヨミ　三男喜久夫　三女千代子

正岡芳一郎　奈良原神社々掌　久和村鍋地二番戸　明治二三年七月四日生　父喜作　母キン　妻マサ　岡山関西中卒　神職の傍ら九和郵便局々長

その他の地区、例えば「周桑郡」「新居郡」などからは正岡氏は一名も出て来ない。視点を正岡氏が必要とされた時代に定めてみる。つまり河野氏末期には、幸門、鷹取の山城を守備する傍ら、筆頭家老職として幼君を傅育するため道後湯月城に詰める場合が増えてくる。勿論、それは正岡氏の本家筋の話であるが、枝分けしたり、帰農したりした正岡氏が棲みついた先が、竜岡の山の中だったり、久万山だったりしたのだろう。意味のない分布の仕方はないはずだ。神職を司る氏族だから、当然、山伏や山の民との交流は深い。湯月城が落ち、南へ下がれば久万の山の中、東へ戻れば高縄・楢原の山や森である。北は平野と海。父祖の地には縁族が名を変えて、帰農していった……そんな図式が浮かんでくる。そして、もう一つ、正岡氏が居を構えた周りには渡部と田中の姓が多いのも特徴だ。

高縄半島の谷間と山麓の平地や道後平野、浮穴郡の農山村は河野家主流派武将の本拠地であった。彼らは分家縁組などによる血縁、地縁で結ばれていった。

一方、海と島を支配する諸将は河野家に属しながらも九州、中国との関係も深く、独自の行動をとることもあった。革新、革命の気風はそちらにあったが、主流にはなれなかった。

この二つのバランスの上に河野家があり、やがて嫡庶の問題で内紛が続出していった。

こうした騒動は戦後の動きから検証すると、筋道がよく見える。伊予の内紛は、必ずあとになって利益を得ているのは来島・村上といった水軍諸将だと指摘されている。

得した奴は誰だ、と追求して事件の真相にアプローチする推理小説の手法が、ここに生きている。

「久万山六千石」にようこそ！

『風早』の二〇年間に及ぶバックナンバーは、ほとんど洗い尽くした。何編かはコピー出来る容量の関係（一回につき五〇ページまで、三回限り【註】今は八〇ページ、五回まで）で、まだ入手していないのもあるが、それも時間の問題にすぎなかった。むしろ、事態が新しい展開を迎えて、ぼくの目は「九万山」に注がれているため、そちらの分野のコピーが優先され、一種の手抜き状態となっている。

「旧街道」は昭和三七年（一九六二）五月から二ヵ月間にわたって『愛媛新聞』に連載された企画を単行本に纏めたもので、さきに入手した「古城をゆく」同様、当時の地元新聞記者の、目配りのきいた、テンポのいい取材が快い。その当時の街道の様子が判れば、いろんなヒントも掴めよう。

■「旧街道」松久敬著・昭和三〇年代のルポルタージュ

庄屋跡　天明七年（一七八七）二月一七日、土佐の中央部と伊予の中核を結ぶ凍てついた九万街道はただならぬ人影に朝のしじまを破られた。ヒタヒタとしのび寄るワラジの音は県境ま近い上浮穴郡美川村東川に集結、無言の統率のもとにひとかたまりとなってここの庄屋梅木茂十郎の門をたたき『松山藩の間人（もうとう）百姓＝水のみ百姓＝に召し抱えてもらえるよう』と嘆願書の取り次ぎをたのんだ。世にいう土佐紙すき（漉）一揆の逃散（ちょうさん）であった。郷土の作家小田武雄さんはこれに取材した小説を発表、美川村出身の現砥部高校教頭伊藤義一さんも研究調査しているが、山あいのこの旧道を訪れてみてはじめて農民のみじめさがわかるような物悲しい街道である。

この書き出しで、往時へ読み手を誘いこむ。一二〇〇～一三〇〇㍍はある県境雑誌（ぞうし）山の峰伝いに東川に着いた一揆の連中は庄屋の世話を受けて神社や寺に二泊し、地元民から食事の提供を受けた。その頃の庄屋屋敷は跡形もないが、使っていた井戸だけが残っている。

東川は土佐との境界が近すぎる、というので彼らは美川村七鳥へ向かう。旧道が郡内でいちばんはっきり残っているのがこの地域だった。東光寺前からカシガ（返し）峠、程野、色ヶ峠を経て有枝に通じる道で一里塚が建っている。藩政時代に松山市札の辻を基点とした十里目のもので、石にも『松山札辻より十□』と里の字がこわれたものが刻まれている。（中略）高岡元村長も旧道を通って松山へよく行った人。八時間から一〇時間はかかっていたそうで、その日は疲れて仕事にならず、道後温泉につかって一泊、翌日仕事をすませてまた一泊、翌朝出発して夕方帰るという三日がかりの旅だった。

道は七鳥から美川村有枝へと続く。有枝は一一〇戸の集落。元

弘形村分に属し日浦、黒岩、大川、有枝と合併して各文字をつづり合わせてヒロカタと呼んだ。道は有枝川を渡るとふたつに分かれ、一方はへんろ道で久万町槙谷を経て岩屋寺へ、いまひとつは全山鬱蒼としたハジカミ峠を越えて久万町野尻へ通じる。（中略）地区の中心地でひときわ高いところに庄屋分家がそのまま形をとどめていた。山内門十郎という庄屋が最後で土佐山内容堂の流れをくむ人。初代県議ともなった。萱葺きに天井は八分板、廊下の板ばりはケヤキ、欄間は一枚一万円（註；当時）以上もするというほどの造作をかけ、屋敷を取り囲む石垣は城壁のように気高くソリを打って庄屋時代の権勢を推察できる姿だが、無人で荒れ果てようとしている。本家庄屋は二〇㍍ほど離れたところにあったらしいが、石垣の一部を残すだけで田畑に変わっている。

旧久万街道の六里石・東明神　四四番札所・大宝寺本堂で開基は千三百年前

■四国遍路四十四番の札所・大宝寺

大宝寺　谷を渡り山を越えて、六〇一人の土佐藩百姓一揆の連中は、（久万町）菅生山大宝寺に逃げ込んだ。

大宝寺の開基は古い。七〇一年、百済から聖僧が十一面観世音を奉持して渡来、菅生山の霊地に草庵を結び安置した。その後、弘法大師によって霊場、すなわち八十八ヵ所のうちのちょうど真ん中の四十四番となった。本堂を囲む大ヒノキの樹林は霊場をいっそう荘厳なムードに包んでいる。

百姓一揆はさらにひろがって、二月二四日、野川郷（高知県吾川）から一〇〇人余りが合流した。寺内は戒厳令下の様相を呈し、解決まで、一ヵ月半を要し、ここの住職と理覚坊の住職が土佐藩と掛け合って、逃散百姓の罪は問わないという赦免状をとり、七〇〇余の百姓は久しぶりにもと来た道を境野峠を越えて引き返すのである。

「旧街道」は、ここから二一〇年前の事件から離れ、「久万街道」を松山へと上って行く。　久万山というと三坂峠から以南をさす

が、伊予の北海道という形容がよく使われている。夏なお涼しいという含みなのだろうが、自分たちの土地を揶揄した面もあって今後はやめましょうやという声が起こり、このごろは使われていない。その代わり「伊予の軽井沢ともいわれるこの久万町は……」と、うってかわって急行バスの女車掌はいとも涼しげな声で車中案内していた。

久万街道は明神を過ぎて（註；あっさり、明神を見下ろす大除城をパスしてしまったのはなぜか）いよいよ難関の三坂峠にかかる。人呼んで〈辞職峠〉。久谷側から上る峠は胸つき八丁ともいえる道のりだ。地方回りばかりやらされているお役人が、久万勤務をおおせつかり、いっそ辞職でもしようかと思いつめながらこの峠にかかる。しかし思い直して、次には本庁に帰れるかもしれないという淡い希望を抱いて、やっとの思いで峠を越える。

■「久万街道」にまつわる歌、ふたつ

三坂を越えりゃ雪降りかかる
帰りゃ妻子が泣きかかる

峠を越す馬子たちはこごえる手綱を握りしめ哀調切々と歌った。難所ぶりが窺える。峠には茶屋が二軒あった。その一軒が夏草とサツキに囲まれて、今も残っている。屋根の葺き替え中に天井から出てきた看板は左から『鈴木旅館、御支度所』と肉太に横書きされていた。春三月ともなれば、遍路姿も賑やかに、峠を境に上がる鈴、下る鈴の音は切れなかった、一日四～五〇〇人が往来していたという。藩政時代には役人は馬で越していたが、明治も末期になると久谷側の桜休場まで馬車が通り、あとは徒歩、峠には久万から来た人力車や客馬車が茶屋まで一日三回通い、峠からラッパを吹いて合図していた。

札の辻からの里程表では久和村桜休場が五里、三坂を越えて久万もち東明神までが六里となっているが、その間を〈坂道一里八丁〉といって実際より多く見積もっていた。荷物や自転車を運んでの賃金割り出しにトクをしていたわけ。二神のばあさんという女運搬人がいて、峠を、自転車をかついで一日三往復し、一回五〇銭をもらっていた。旅館代が五〇銭、うどんが二銭の時代だから良い稼ぎ。（中略）

峠で一緒になる国道三三号線は明治二十三年に開通した。道後平野から忽那七島を展望できる新名所としてクローズアップされ、峠には展望台ができ、新旧両道を結んでボンボリが点される賑わいを呈したそうである。

難所を過ぎればあとはダラダラ道を松山へ向かうだけとなる。（略）道は旧久谷村を通って旧坂本村分の榎にさしかかる。さら

に下ると丹波。下り坂はここで終わるし、反対に上り坂の始まりになるので、通行の人たちはここで一息いれた。茶屋が五軒あって遍路や一般旅人で昼夜賑わったという。バスは丹波が終点で、停留所のところから旧道が右に通っている。大きいセンダンの木があってワラジを売る茶店もあったが、いまは広い敷地を残すだけとなっている。

旅人の　うた登りゆく　若葉かな　　子規

井手口は三坂からの宿場となっていた。東屋、橋岡屋、上野屋など大小いくつかの旅人宿があった。藩政時代に久谷は久万山郷ということになっていたから、松山から久万へ視察にいく役人はこのあたりで一泊していたらしい。というのは一日で久万まで強行しなければならないのに、久谷を久万山郷にしておけば庄屋あたりに一泊して接待費は相手もち、出張旅費が浮かせるという俗世間的な手であった。

道は恵原から重信川ほとりの広瀬へと続き、そのまま川を横切って森松へと下る。森松橋のないころは上流の広瀬から真っ直ぐ重信川を渡船や裾をからげて渡った。下って道は森松の町からいまの線路伝いではあるがもっと西方を石井へと続いていた。久万街道は森松を過ぎると田圃道をまっしぐらに、平坦コースとなる。哀歓を秘めて街道は城下町を札ノ辻に到着する。県境の東川より十一里の道のりであった。

街道はここで途切れたわけではない。藩政時代、松山から旅に出る起点の地は札の辻だった。風早郷へ向かう今治街道はここから北上して行った。堀江、粟井、北条へと続く海岸道となる。粟井坂を越えて伊予灘に入ると風の色が変わる、と先に書いた。それまでは興居島や太山寺山のお陰で風が優しかったのが、突然、海からの西風をまともに受ける。

久万山から風早郷への旅は、劇的に変化したわけである。

旅人で賑わった桜休場の茶屋跡

旧札の辻跡　各街道はここが始点